

入学試験問題（第 1 回）

国 語

（60分 満点：150点）

注 意

1. 指示があるまで開いてはいけません。
2. 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
3. 用具類の貸し借りは禁止します。
4. 指示があるまで席をはなれてはいけません。
5. 質問があればだまって手をあげて監督者を呼びなさい。
6. 問題用紙も解答用紙といっしょに出しなさい。問題用紙の
余白は下書きとか計算などに利用してもかまいません。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

その夜、わたしはなぜだか寝付くことができなかった。気持ち妙に昂^{たか}ぶって、夜中になっても A 落ち着かない。そうやって長い間、布団の中で格闘していると、いろんな思いが頭の中を交錯し、パンパンに膨れ上がってしまった。この先の自分のことや、過去の苦い思い出なんか B と頭の中を占拠してしまって苦しい。

これはまずい。わたしはがばりと起き上った。何かしなければ、 C 苦しくなって窒息してしまう。テレビでも観ようかとも思っただけ、そのためには前に積まれた本どもをまた片付けなければならぬ。それに夜中の三時じゃどのみち何もやってないだろう。本でもあればなあ、とわたしは闇をぼんやりと見つめたまま思った。そうすれば、時間をやり過ごせるのに。

そこで、「あ」と声が出た。よく考えたら、ここは本屋じゃないか。本なんて腐るほどある。いままで敵対心しか抱いていなかったから、彼らの本来の役割をすっかり忘れてしまっていた。

わたしは明かりをつけると、さっそく何か面白そうな本はないかとあたりを物色しはじめた。でも、それが面白いかなんてまるっきり見当もつかない。どれもみな同じ、古臭い本なだけ。叔父ならきっとこの中から、はいはいといくらでも自分の好きな作品を見つけられるのだろうけど。

仕方なしに、山と成した文庫本の前に立って、目をつむった。そのまま手を伸ばし、最初に手に触れたものを「えいや」と引き抜いた。それは『或る少女の死まで』という作品だった。作者は室生犀星。高校の現国の時間に名前だけは聞いたことがある人だ。

枕もとのランプだけの薄暗い部屋で、布団にもぐったまま、わたしは特にこれといった感慨もなくそれを読み始めた。きつと退屈ですぐに寝てしまおうと思っていた。

ところが、どうしたことだろう。一時間後には、わたしはその本にすっかり夢中になってしまっていた。文章としては、むしろ葉遣いのところもあったが、内容は普遍的な人間の心理がテーマになっていて、それがわたしの心にもすんなりと染みこんできた。

物語は主人公が金沢で過ごした少年時代から、詩人になるという夢を持って上京し、根津で生活をはじめたころのころを中心を書いてあった。そこに、腹違いの姉や、友人の恋人といった女性への思慕がからむ。タイトルの「或る少女」というのも、上京後、仕事もないまま貧困の中で喘^{あえ}いでいた主人公が、ふとしたきっかけで知り合う少女のことだった。その少女との交流により、彼の傷だらけの心がほんの一時ではあるものの、癒^いされていくのだ。

そうした作中でわたしが最も心引かれたのは、複雑な環境で育ち、鬱屈^{うつくつ}とした青春時代を過ごす主人公を描きながらも、どこか静かな

優しさに作品全体が包まれているところだった。その言葉では表せない穏やかな感情が、じんわりと胸に迫ってくる。そう、それは強いというならば、作者の人生への確固たる愛情からなるものに違いなかった。

「気がつけば、もう夜が白々と明けはじめていた。」

それでも、わたしは頁^{ページ}をめくり続けた。

翌日、サトル叔父さんがやってくると、興奮冷めやらぬ気分彼を迎えた。いつもならろくに挨拶さえしないわたしが飛んできたので、叔父は B を丸くする。

「この本、面白かった」とわたしは『或る少女の死まで』を手にした。

すると、どうだ。叔父の顔が途端にパアツと明るくなった。まるで素敵な誕生日プレゼントをもらった子どもみたいに。

「そうだろ、そうだろ？」

叔父は、自分のことのように興奮して言う。

「うん、すごくよかった。なんていうか、ぐっときた」うまい言葉がでてこない自分がもどかかった。「ぐっと」なんて、わたしの心の複雑な動きの説明になど、ちっともなっていない。

「いやあ、うれしいな、貴子ちゃんがそう言ってくれて。しかも、いきなり室生犀星とはまた渋いところを突くなあ」

叔父が本当にうれしそうにしているの、わたしまでんだか釣られてうれしくなってしまう。

わたしたちはそうして、ひとしきりその本について語りあった。いままでまったく接点のないように思えた人と、ふと C 一つのこと結びつけることの喜び。それはたとえ相手叔父のような人でも、いや叔父のような人だからこそ、とても心弾むものだった。

思わぬことが、自分の知らなかった扉を開くということもある。そのときのわたしの気持ちにまさにならった。

そう、そのことがきっかけとなり、わたしはどんな本を読みまくるようになったのだ。いままでずっと心の奥で眠っていた読書欲が、ポン！と音を立てて弾^{はじ}けて飛び出して来たみたいな気分だった。

わたしは味わうようにゆっくり一冊一冊を読んでいった。時間はいくらでもあったし、いくら読んでも本がなくなる心配もなかった。永井荷風、谷崎潤一郎、太宰治、佐藤春夫、芥川龍之介、宇野浩二……。名前は知っているけどちゃんと読んだことのない人、名前すら知らなかった人、とにかく面白そうだと思ったものは全部手にとって貪欲^{どんよく}に読んだ。それでも読みたいものは次から次へと見つかる。

こんな素晴らしい体験があるということを、それまでぜんぜん知らなかった。なんだか今まで人生を損してきたような気持ちにさえる。

わたしは以前のように惰眠をむさぼることをもうやめにした。もうその必要も感じなかった。眠りの中に逃げ込む代わりに、叔父と店番を交代すると、自分の部屋か喫茶店で本を読んだ。

古本の中には、わたしの思いもしないたくさんさんの歴史がつまっていた。それは、決して本の中身に関してのことだけではない。一冊ごとに、長い年月を経た痕跡^{こんせき}をわたしはいくつも発見した。

たとえば、梶井基次郎の『ある心の風景』の、ある頁ではこんな箇所に出くわした。

視ること、それはもうなにかなのだ。自分の魂の一部分或いは全部がそれに乗り移ることなのだ。

こんな具合に、かつてその作品を読み感銘を受けた人が、ペンで横に線を引いているのだ。自分も同じくその箇所に感銘を受けたから、知らない誰かと心を通じたようであれしくなった。

ほかに、押し花の葉^はが入っているのを発見することもあった。そんなときわたしは、もうとくに薄れてしまったその花の匂^かいを嗅ぎ、これは一体どんな人が、どんな時代に、どんな想いで、ここに挟んだのだらうなどと思いを馳^はせた。

そうした⁵時を越えた出会い、古本でしか決して味わえないものだった。すると、それらを扱う森崎書店という古書店へも、次第に愛情を覚えるようになった。その静かに時が流れる小さな空間に、こうして身を置いていられることが、とても貴重なことのように思えてくる。おかげで店の作家たちにもずいぶん詳しくなり、常連さんたちともいつの間にかやらずっかり馴染^{なじみ}みになった。サブさんはわたし

が以前と一味違うのに気が付くと、「お、貴子ちゃん、やるじゃない」とちよっぴり見直してくれた。

そしてもう一つ、街の散策というのも、わたしの新しい習慣となった。ちよどそのころはすっかり涼しくなり、歩き回るには持っていける季節だった。街路樹の葉が日増しに黄色くなる様子は、自分の心のゆっくりとした変化に対応しているようで、なんだかくすぐったかった。

歩きながら、はじめて神保町に來たときとはまったく違う気持ちで、わたしは街を眺めた。すると街全体が冒険の場に思えてきて、胸がわくわくした。なにせ下町情緒あふれるこの一角には、古本屋、喫茶店、異国風のバーなどふらりと立ち寄ってみたくなる店が、大通りや裏路地にたくさんあるのだ。それでいて、街全体は独特の穏やかさに包まれ、わたし⁶が一番苦手とする猥雑^{わいさつ}な雰囲気⁶がどこにもない。

(八木沢里志『森崎書店の日々』 二〇一〇年 小学館より 一部改変した。)

問一 本文中の空欄A、Cを埋めるのに、もっとも適切な語句を次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア どんどん イ ぐるぐる ウ そわそわ

問二 傍線部1「気がつけば、もう夜が白々と明けはじめていた」とあるが、この表現からは「わたし」のどのような様子が読み取れるか。それを説明した次の文の空欄に当てはまる説明をこの傍線より前の本文中から六字で探し、抜き出して書きなさい。

「わたし」が室生犀星の『或る少女の死まで』に□□□□□□になっている様子。

問三 傍線部2は慣用表現です。傍線中の空欄を埋めるのに適切な漢字一字を書きなさい。

問四 傍線部3「叔父の顔が途端にパッと明るくなった」のはなぜか。理由の説明としてもっとも適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 好きな本をプレゼントしてもらったから。
イ 「わたし」が明るく挨拶をしてきたから。
ウ 本に対して自分と同じ感想を持ってくれたから。
エ ようやく真面目に読書をするようになったから。

問五 傍線部4「一つのこと」とはどのような活動を指しているか。その答えとしてもっとも適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 会話 イ あいさつ ウ 読書 エ 店番

問六 傍線部5「時を越えた出会い」とはどのような人々との出会いのことか。その答えとしてもっとも適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本の作者たち イ 本の読者たち ウ 本の登場人物たち エ 店の客たち

問七 傍線部6「わたしが苦手とする猥雑な雰囲気はどこにもない」について

- ① わたしが猥雑さを苦手とし、静けさを好んでいることが読み取れる一文を、本文中の室生犀星の『或る少女の死まで』について書いてある部分から一つ探し、その最初の五字を書きなさい。
- ② わたしが猥雑さを苦手とし、静けさを好んでいることが読み取れる一文を、本文中の森崎書店という場所について書いてある部分から一つ探し、その最初の五字を書きなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(抜き出しの問題に答える場合、句読点・記号は全て一字とする)

すでに私の娘は大学を卒業して勤めていますけれども、子供を育ててきて見ていると、今の子供さんたちというのは、本当に忙しい。自分ひとりの時間を持つということがとても少なくなってきたような気がするんですね。これは、とても気の毒なことだと思います。少なくとも私の時代は、自分ひとりの時間を持つだけの余裕がまだありました。A 小説を書くということが私にとっては救いであり、そこに逃げ込めば、ホッと息をつける。B 予防注射をするような効果を持っていたということが言えると思うんです。最近、本

を読むことが徐々に少なくなってきたということが新聞やテレビでよく言われます。本を読むということは、単に面白いものを味わうということだけではないんですね。

C、読むことで自分がまだこれから経験することを先に経験することができる。これが本を読むことの非常に大きな意味なのです。

特に、皆さんのような若い世代、これから人生のいろんなことを初めて経験していく世代の人たちにとっては、D 本の中でそれを予備的に体験しておくことがとても大きな意味を持っていると言っていると思います。

これが、本を読まなくなってしまうと、一種の免疫ができない。予防接種を打たないで、いきなり伝染病のはやっているところへ飛び出していくようなものですね。これは、とても危険なことなのです。

例えばよくありますけれど、エリート・コースですと来た人が社会へ出て、いきなり会社の上司に怒鳴られたりすると、途端に会社に行けなくなってしまう。これは、それまでに自分がしくじったとか、失敗したりといった挫折の経験を持ったことがないからで、一度そういうものに出会ってしまうと、立ち上がれなくなってしまう。

こういうことは、あらかじめ小説や優れた映画やドラマの中で経験しておくことによって、それに対する免疫ができるんです。

それが本を読むことの、とても大きな意味であるわけです。E、若い頃に本をたくさん読みなさい、というのは、決して漢字をたくさん覚えるからとかそういう意味ではなくて、自分がこれから生きていくための体力づくりをする、というふうに考えればいいと思うんです。

中高時代の皆さんが、本を読んだりすることが一番できる年代なんです。私も、皆さんたちの年代の時に読まなかったばっかりに、いまだに読めずにいる本がたくさんあります。「ああ、あの時、読んでおけばなあ」という思いで、あとで悔やむことがしばしばあります。

皆さんのように、そういう年代にいますと、あまり感じないかもしれませんが、今の皆さんは本当に、まだまだほとんど水分を吸っていない「スポンジ」のようなものです。いくらでも「養分」を吸い取ることができる能力があります。それを無駄にしないで、どんな自分の中にいろんなものを吸収していったきたい。皆さんが読んだ本をそのあとどうするかはわかりませんが、F、本棚にそのまま入っているにしても、友だちに貸してあげるにしても、その自分の読んだ本というのは、自分の足の下に積み重なっていく、というふうには私はよく言います。それにつれて、自分の目は少しずつ高くなっていきます。自分の視点が高くなるということは、遠くが見えるようになる、ということです。遠くが見渡せる、ということは、自分から遠く離れた人間のことを身近な人間のように感じられるということでもあります。そのために、本を読み、いい映画を観るということが、大切なことになるわけですね。

本を読んだり、ものを書いたりするということ、これを重ねていくことが、自分を外から眺める能力を身につけるための基礎的な栄養になっていきます。問題は、ただ数を重ねていくだけでは、それが自分の身につくわけではない、ということです。つまり、どういうふうな目で本を読むか、すぐれた映画を観るか、すぐれたドラマを観るかということ、例えば、同じ数だけ本を読み、同じ数だけ映画を観ていても、それが自分の「身につく人」と「つかない人」がいる。

私は大変映画が好きで、かつて映画監督になりたかったと先ほど言いましたけれども、玉川大学の授業の時に、映画の見方というのを、ほぼ時間の半分を費やして学生さんたちに講義しています。自分が今まで観た映画の中から、いろんな場面をビデオにコピーしまして、映画には映画の文法というものがある、映画には映画の決まりがある。こういうふうには画面をつないだ時は、こういう意味なんだとか、作者はこういうつもりで、この場面を撮っているんだ、とかいうことを授業の中で教えています。

それというのも、今の映画というのが、「誰にでもわからなければ、いい映画ではない」というような基本で作られているからなんですね。つまり、映画を観るために勉強しなきゃいけないという発想が、今の若い人にはほとんどなくなってきた。「よくわかんない」というのは映画が悪いんだ、と考えるようになってきた。⁴これは間違いなんです。自分が勉強不足だということもあるんですね。

これが小説だったら、そんなことは絶対に言わないと思うんです。

つまり、言葉の意味が、小説に出てくる単語の意味がわからなかったら、これは辞書を引かなければ、わからないわけですね。そんな言葉を使った作家が悪いというふうには、ふつうは考えないと思うんですけれども、映画のようなものになりますと、ちょっとわかりにくいものになると、「つまらない。これは悪い映画だ」ということになってしまう。それは、自分が見る目を育てていないからかもしれないですね。そういう発想が、どうも最近の若い人たちからは失われてしまった。

そういうわけで、それを少しでも学生さんたちに伝えたいと思って、授業の時にやるわけですが、たとえば言いますと、一本の映画な

り、一冊の小説が大変に大きい器いっぱいの内容を持っていたとします。それを、読み手のほうにその内容をずーっと注ぎかけてくるとする。その時に、受け取るほうの持っている器の大きさがどれぐらいあるか。たとえば、受け取る側の器がコーヒーカップの大きさでしかなかったら、いくらそのコーヒーカップの中にどんな内容が注ぎ込まれていったとしても、そこからあふれた分は全部、外へ流れてしまっ、結局、残るものはコーヒーカップ一杯分の中身でしかない。

それと同じように、自分の中に注がれた内容をどれだけ受け取ることができるかというのは、自分の持っている器の大きさによるわけです。つまり、自分が受け取る器というものを大きくするのは、自分の責任なんですね。

同じ映画を観ても、どこに感動するか。ただトム・クルーズがカッコよかったというだけで終わるのか。そうではなくて、その時代背景の中で、あの主人公の生き方はどういう意味を持っていたのか、というふうなものの見方ができるのか。それは、自分の器の大きさを自分がどこまで大きくできるかということにかかっているわけです。

それは、自分が絶えず何かを学ぼうという姿勢で物事に接していく、それによって大きくすることができると、いうふうに言っていると思います。もちろん、そのためには最低限、数をこなすということも必要ですが。例えば、小説が好きの人だったら、逆に、今の世界情勢の解説をしてある新書とか、そういう本を読むということが、むしろ自分の小説を読むための器を大きくするために役に立ちます。

さまざまな本を読んだことでどれだけ栄養分が吸収できたか、それを文章を書くということによって、自分の中に確かめることができます。

もし、皆さんが文章を書くような機会があれば、まず自分のことを書いてみると思います。自分がどう思っているか、を書くのではなくて、⁵自分が、もし他人から見たら、どう見えるだろうか、ということを考えてながら書いてみることです。文章を書くための基本的姿勢は、自分を外から眺められるかどうか、ということなんです。自分がしていること、自分が考えていることを、他人の目で見るという訓練。それは自分自身がどういう人間かということ自分をわからせるのに、とてもいい方法なんです。

私が大学の授業の中で、学生たちが一番最初に書かせるのは、自分を主人公にした小説なんです。その時に、⁶一人称で書かないように、つまり「私は」というかたちで書かないように指示します。例えば、和子さんなら、自分のことを「和子は……」というかたちで書かせる。それは、自分を外から眺めるためのひとつの訓練なんです。自分を外から眺められるかどうか、つまり、自分が他人の目にどう映るかを常に考えていられるかどうかということが、実は、大人になるということなんです。自分のことを他人の目で見られるかどうかにかかっているんです。それは、自分がしてほしくないな、と思うことを他人にはしない、相手の身になってみれば、こういうことを言われたらいやだろうなとか、こういうことをされたらいやだろうな、ということが理解できるかどうか、これが大人になるということの

境目です。

歳をとっても、ちっとも大人になっていない人も、世の中に大勢います。世の中がそういうきちんと X ばかりであれば、問題のない社会になっていくんでしょけども、決してそうではないわけです。他人の気持ちが全くわからない、自分勝手に、自分の都合の悪い時だけは怒ったりする。そういう人がたまたま自分の上司に当たったりすると、悲劇ですけども、「あ、こういう人がいるんだ」というふうに世の中を眺めていることができれば、それも自分が大人になるための栄養になっていくということになります。

（赤川次郎『イマジネーション』 今、もっとも必要なもの』 二〇〇七年 光文社より 一部改変した）

問一 本文中の空欄A～Fを埋めるのに、もっとも適切な語句を次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ たえ ウ とくに エ 例えば オ いわば カ あらかじめ

問二 傍線部1「こういう場所」とは、何のことか。本文中から八字で探し、抜き出して書きなさい。

問三 波線部ア～エの中で一つだけ表している事柄が他と異なるものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 免疫 イ 経験 ウ スポンジ エ 養分

問四 傍線部2「身につく人」は、どのようなことをして身につけることができるのか。「～こと」に続く形になるように、本文中から二十三字で探し、最初の五字を抜き出して書きなさい。

問五 傍線部3「つかない人」はなぜ能力が身につかないのか。理由となる説明を本文中から十五字で探し、抜き出して書きなさい。

問六 傍線部4「これは間違いなんです」とあるが、それはなぜか。理由の説明としてもっとも適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 映画というものは、誰にでもわかるように作ることが求められるものだから。

イ 映画を理解するためには、どれだけ多くの映画を観たかが重要だから。

ウ 映画を観ている間に、辞書などで調べ物することはできないから。

エ 映画を観るためには、映画の文法というものを学ぶべきだから。

問七 傍線部5「自分が、もし他人から見たら、どう見えるだろうか、ということを考えながら」とあるが、そのような能力を端的に言った表現をこの傍線より前の本文中から十一字で探し、抜き出して書きなさい。

問八 傍線部6「一人称」で書くとはどのようにして書くことか。その答えとなる説明をこの傍線より前の本文中から十五字で探し、抜き出して書きなさい。

問九 本文中の空欄Xを埋めるのに、もっとも適切な表現を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大人になった人 イ 大人になっていない人

ウ 他人の目で見えない人 エ 外から眺められない人

「科学」という言葉を知らない人はいないだろう。もの凄く頻繁に使われている言葉だ。それなのに、いったいどういうものを「科学」と呼ぶのかというと、それにイマイカクに答えられる人は非常に少ない(実際に僕の周囲で軽く調査してみたが、「どうしてそんなことをきくの?」という目で見られるだけだった)。大勢の人が、「科学」に対して思考停止しているのである。

わからないのも当然で、この科学ウツンセイの時代にあつて、大勢の人たちは、むしろ科学を自分から遠ざけようとしているようだ。「そんな難しいことは専門家に任せておけば良い」と考え、なるべく関わらないようにしている。大袈裟に避けているとまではいなくても、なるべく見ないように目を逸らせている。そんな態度を取る。「難しいことはわからんから」とか、「私、駄目、そういう話は」と話を聞くまえから苦笑しつつ手を振って拒絶する。それくらい、多くの人に嫌われているのが今の「科学」である。

ところが、僕が子供の頃(だいたい40年から50年ほど昔である)には、少年少女はみんな科学の虜になっていた。さきほど登場したお茶の水博士も数島博士も、その当時のヒーローである。科学とは、すなわち「A」だった。将来きつと素晴らしい世の中になる、という輝かしい「絵」を大量に見せられた。そういう時代だったのだ。

それから半世紀が過ぎ、その「輝かしい未来」はどうなったか、というと、エアカーが飛び回る大都会や、一般人の宇宙旅行などは実現しなかったものの、コンピュータも携帯電話もカーナビも、すっかり普及し、身近なものになっている。むしろ想像以上に科学が浸透したといっても良い。世界中の人がその恩恵を受けている、とはまだ言いがたいけれど、トータルで平均的に評価すれば、まあまあいい線いっているのではないか。

今の若い人たちは、そんな「輝かしい未来」に生まれてきたのに、どうもあまり「科学少年」「科学少女」にはなっていない。また、なろうともしない。どちらかというと、自然を愛するナチュラル指向で、スローライフに憧れている。僕たちの世代よりも「科学的に後退」しているのではないか、と思えるほどだ(これについては、科学的な証拠はない。僕の単なる印象である)。想像ではあるけれど、おそらく、そういう教育がなされた結果だとは思ふし、特に大きな不都合が生じているわけでもない。僕は、べつに日本が科学立国でなくてはならない、なんてことを主張したいわけでもないし、今の日本の社会に対して個人的な不満も全然ないし、とやかく言うつもりは毛頭ない。

ないのだけれど、それでも、みんながこんなに「科学」を避けようとし、すっかり「科学」から遠ざかってしまつて本当に良いものか、いくらなんでもちょっと不自然なのではないか、と心配になることがときどきある。また、そういう「非科学的な人たち」を見ると、

「その人たちがいかに損をしているか、」と他人事ながら可哀想だと感じる。思い過ぎかもしれないから、放っておけば良いことなのか、と悩む。だいたい、僕は「思い過ぎ」をするタイプで、言い出すのが早すぎるのが悪い癖である。だから、あと10年くらいしてから、言った方が良いのかな、とも思う。

「中略」

僕がまだ大学にいる頃、理学、工学、社会学などの研究者が集まつて、環境学研究科というグループを作つた。理学部や文学部の先生たちと一緒に問題解決をする立場になったのだ。このときに感じたことだが、ようするに、「文系」「理系」というのは、絶対的な位置ではなく、それぞれの立場から、「あちらは文系っぽい」「こちらの方が理系っぽい」という相対的な(多くは主観的な)観測による「印象」でしかない。

さて、しかし研究者ではない人たち、ほとんどの人たちにとっては、文と理はときとして、支配的な意味を持つ。学校の得意科目によつて文系と理系に分かれていくためである。特に今の社会では、大学受験が人生の進路を決める大きな関門になっているので、どうしても、この時点で自分をどちらかに詰め込まなくてはならない。

また、もっと早い段階(たとえば中学生くらい)で、「私は数学は駄目」と諦めてしまうこともあるだろう。どうでも良いくらいもの凄く些細な「好き嫌い」が、その後の進路を決めてしまうのも、やはり「受験」があるためだと思う。

そして、その最初のちょっとした「嫌い」が、その人を一生、科学から遠ざけてしまうのだ。「数式を見ただけで拒否反応が」なんて言う人もいる。たとえば、その人にとって、とても大事なことを説明しようとしても、「いや、難しいことはわからないから結論だけ言つて」と拒絶される。明らかに思考停止。心当たりはないだろうか?

僕は、そういう人たちを「文系」という言葉だけで片づけるつもりはないし、また、それが悪いといっているのではない。この本で書きたいことは、そういう思考停止が、その人自身に「不利益」をもたらしている、もっと極端な場合には「危険」でさえある、ということを知りたいだけだ。

もし、こういうことを黙っていれば、多くの文系人が損をして、相対的に理系人が得をする。だったら、べつに良いではないか、という理屈もあるかもしれない。実際に、そういうことを口にする理系インテリは多い。

しかし、現代社会は民主主義を基本として動いている。大衆が方向性を決める。一部の専門家がすべてを決めることはできない。だと

すると、大勢の人が非科学的な思考をすれば、それが明らかに間違っている、社会はその方向に向かってしまう。ファッションの流行のように、個人的に避けられるものは良いけれど、エネルギーや防災の問題など、すべての人の生活に直結するようなものだってある。そうになると、「わからない人は損をすれば良い」と突き放してもいられない。できるだけ、多くの言葉を駆使して、なんとか説明をし、納得してもらう努力をしなければならぬだろう。なにしろ、「そんなこと聞きたくない」と³□を塞いでいる人たちだから、効果は薄い。それでも、少しずつでもこういった言葉を発していくことは大事だ、と思うのである。

本書は、タイトルどおり「科学とはどういう意味か」について書くとしたものである。ところが、さてそろそろ執筆しよう、と思っただけで、東北で巨大な地震が発生した。津波と原発による被害が特に大きかった。僕は現役を既に退いていたけれど、それでもかつての仕事仲間から大量の情報がもたらされ、また多くの助言を求められた。実際に、計算をしてほしいという依頼もあった。詳しいことを書くつもりはないけれど、2週間ほどはそれらの対応に時間を取られ、原稿を書き始めることはできなかった。

連日TVやネットで報道されている情報にもなるべく目を通し、また、必要なものは過去に遡って世界中の情報を収集した。

少し落ち着いてから考えたのは、悲観的なものから⁴□観的なものまで幅はあるにしても、特に国内における情報の多くが、「涙と人情」に流された感動ドラマを作ること終始し、「まずは涙を流そう、でも最後は元氣を取り戻してみんなで笑おう」というような感情に流された演出が目立っていたことだ。そういったものが無駄であるとは言わない。人間にとって「気持ち」の影響力は大きい。けれど、いくら感動しても、いくら泣いても、飢えている人を救うことはできない。いくら一時の笑顔であっても、それは「解決」ではない。まして、「人道支援」と⁵「防災」は別問題である。

よく「自然の猛威の前に人間は無力だ」という言葉で片付けてしまうことがある。これは、「油断するな」という教訓としては正しい。しかし、自然の猛威から人間の命を救うことは、可能である。それができるのが「科学」であり「技術」なのだ。極端な言い方になるけれど、科学的な知識を持っていることが、身を守る力になる。「気持ち」だけでは人は救えない。きちんとデータを分析し、そこから予測し、次の手を打つことが人類の力なのだ。

当然ながら、科学知識のない人が被害者になった、という意味ではない。科学を盲信した、と安易に片づけることもできない。

それでも、「津波が来ても、防波堤があるから大丈夫」という言葉を信じた人は多かったのではないか。そこには、「津波」とは何なのか、どういったメカニズムで安全を確保しているのか。何メートルの津波まで想定されているのか、という「科学」が忘れられている。

「難しいことはいいから、結論だけ言って」という姿勢が、⁶「言葉」だけですべてを処理してしまう傾向を助長する。そこに危険性がある。そういうことを、この災害で再確認した。

今の若い人は、ある程度完備した⁷科学社会に生まれている。携帯電話もカーナビも当たり前になった社会である。発展の過程を見ていない彼らは、どういった原理でそれらが機能しているのかを知らない。知らなくても、その恩恵を受けることができる。充電さえしていれば、誰でもいつでも連絡がつくと信じている。電波がどんなもので、どのような設備によって成り立っているのかを知らない人が多い。十数メートルしか離れていない場所なのに、携帯電話が通じなくなることがあるなんて、考えてもいないだろう。

《こういった「科学離れ」については、昔から問題意識はあった。だから、子供たち向けに科学を教育するシステムをいろいろな形で模索してきた。けれども、僕が信じていることが一つある。そういう教育をしているのは、科学が好きな人たちだ。だから、口を揃えて言う、「科学の楽しさ」を子供たちに知ってもらいたい」と。この言葉を聞いたたびに、「楽しさ」と押しつけている姿勢を感じずにはいられない。

読書の楽しみを知ってもらいたい。スポーツの楽しさを感じてもらいたい。ほかの分野でも、こういった姿勢は根強い。しかし、科学の場合は、そんな悠長な問題ではない、と思うのだ。読書やスポーツが嫌いな人は、それをしなくても良いだろう。楽しみは、ほかにいくらでもある。しかし、科学を避けることは、この現代に生きていくうえではほとんど無理なのである。「僕は日本語が嫌いだから、日本語は聞きたくない」と言うのと同じレベルだといっても良い。もはや、好きとか嫌いで片付けられるものではない、ということだ。

だから、この本に書いた意見は、「これで科学を好きになってほしい」「少しでも興味を持ってもらえれば嬉しい」ということではない。「科学から目を背けることは、貴方自身にとって不利益ですよ」そして「そういう人が多いことが、社会にとっても危険だ」ということである。》

(森博嗣『科学的とはどういう意味か』二〇一一年 幻冬舎より 一部改変した)

問一 波線部ア、オのカタカナは漢字に改め、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

問二 本文中の空欄Aを埋めるのに、もっとも適切な表現を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 高嶺の花 イ 未来の夢 ウ 頭脳の結集 エ 国家の権威

問三 傍線部1『科学的に後退』している「人たちのことを言い表した箇所をこの傍線より後の本文中から八字で探し、抜き出して書きなさい。

問四 傍線部2「支配的な意味を持つ」の具体的な説明として、ふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人生の進路を決める大きな関門になっている
イ その人を一生、科学から遠ざけてしまう
ウ 思考停止が、その人自身に「不利益」をもたらしている
エ 一部の専門家がすべてを決めることはできない

問五 傍線部3は慣用表現です。傍線中の空欄を埋めるのに適切な漢字一字を書きなさい。

問六 傍線部4の中の空欄を埋めるのに適切な漢字一字を書きなさい。

問七 傍線部5「防災」について、筆者の主張する科学的な防災とはどうすることを言うのか。答えとなる説明をこの傍線より後の本文中から二十八字で探し、最初の五字を抜き出して書きなさい。

問八 傍線部6「言葉」について、ここでいう「言葉」とはどのような言葉のことか。その答えとしてもっとも適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 科学的な説明を納得してもらうための言葉
イ 科学とはどういうことかを知るための言葉
ウ 印象を固定させ新しい情報を放棄させる言葉
エ 後の人々に教訓として活用されるような言葉

問九 傍線部7「科学社会」とはどのような社会のことか。「社会」に続く形になるように、本文中から七字で探し、抜き出して書きなさい。

問十 《 》内の文章を八十字以上、百字以内で要約しなさい。なお解答には「科学離れ」「科学の楽しさ」「危険」の三語を入れること。

国語
解答用紙

※印らんには何も記入しないこと。

受験番号

氏 名

評 点

✖

問七	問四	問二	問一	
①			A	
	問五		B	
②		問三		
	問六			
				C

[illegible][illegible]